

津軽地方に牛乳を普及した
ながおすけいちろう
長尾介一郎

現在牛乳は、この津軽地方でも、MやYなど、中央の大資本の会社の製品を中心に飲用されているようだが、昔は、地方の業者が乳牛を飼
い、搾乳し販売する牛乳店の製品がその中心であり、「谷量舎、長尾牛乳」は、この地方における最大の牛乳店であった。

弘前で最初に牛乳を売り出したのは、館山榎吉という人である。『弘藩明治一統誌月令雑報』には、「牛乳は、昔医者が薬用に用いるだけで、
明治になって病院が設置されてからは、健康滋養のため、乳呑児などが用いるようになったが、明治十二年、富田町の館山榎吉が売り出し、
毎日、二、三人ずつ患者に販売した」とある。その場所は、現在の最勝院、仁王坂の下あたりだが、最初はその利用者も、病人や乳呑児など、
ごく限られた人数であったようだ。

時代が明治となり、文明開化の世の中となって、日本人の食生活も少しずつ変化していったが、その最大ものは肉食であった。これまで、
一般に動物食が食用に利用されなかった主な原因は、信仰上の理由からで、つまり仏教が、四足、二足を食する事を禁じた為である。この為、
肉は勿論、鶏卵を食することさえ忌み嫌う地方もあった。

牛乳も同じで、若い嫁が「母乳が足りないから」とか「牛乳は滋養があるから」と赤ん坊に飲ませようとすると、昔気質の親は「もし牛乳

を飲ませれば、いつ迄も四つん這いで歩かし、大きくなってもビロ（唾液）を垂らす」といって嫌な顔をした。いずれも、牛の生態に関連した迷信で、今考えると、笑い話のようなものだ。

長尾介一郎は、一八四五年（弘化二）二月十九日、周庸、きゑの長男として弘前に生まれた。長尾家は、代々二百石どりの津軽藩士で、父周庸は、廃藩置県後、旧藩の財務調べの仕事をしていた。

介一郎は、幼い頃、茶畑町にあった兼松誠の私塾「麗沢堂」に入つて学んだ。兼松は石居と号し、江戸定府の重臣の子で、江戸に生まれ、漢籍や蘭学を学んで、学才の誉れ高い学者であつたが、その後弘前に住み、私塾を開いて子弟の養成にあたっていたのである。この後石居は、藩学校稽古館の督学（教師）となり、また東奥義塾創設のさいは、幹事として活躍した人物だが、介一郎は、この石居の大きな影響をうけて成人した。

石居は、介一郎の温厚篤実な人柄を見込んで、自分の二女たけと縁を結ばせた。介一郎二十二歳、たけは十四歳だった。

介一郎は、義父石居の推薦で、稽古館に勤め、その後一時、東奥義塾の教師をするが、まもなく、第五十九国立銀行（現青森銀行）に勤めることになる。

廃藩置県後、大ぜいの武士達が禄を失なうことになるが、一部の者たちが役人や教師、羅卒（警官）の職につく事が出来たほか、大半は職もなく、手持ちの道具や家屋敷を手放すなど、貧困のどん底の暮らしをしていた。

当時、中津軽郡の郡長だった笹森儀助は、これらの旧士族を救うために、新たな授産事業を考えた。それは、岩木山の麓、常盤野に牧場を作って、開拓民を入れ、牧畜や植林をして、ゆくゆくは酪農を中心とした大農場を建設しよう、という計画である。

笹森儀助は、旧藩の家老を勤め、当時第五十九銀行の頭取だった大道寺繁禎に相談し、この計画を進めていき、菊池九郎や介一郎らを役員の名に連ねた。笹森と介一郎は、同年生まれであり、幼い頃からの親友でもあった。

笹森は、この牧場建設のため、郡長の仕事を辞めると、自費を投じて常盤野一帯の調査にあたる一方、屢々上京して明治政府に陳情、計画実現のための委託金借り入れを申請した結果、一八八一年（明治十四）十二月、農商務省から、一万八千円の資金を借り入れることが出来たのである。

笹森は、そのうち六千円を支出して、牛馬や農機具を購入して帰郷、ここにその計画の実践に踏み切り「農牧社」を設立する。そして、社長大道寺繁禎、副社長笹森儀助、牧畜係中畑清八郎、滝川宗武、会計係芹川高正、監督長尾介一郎、菊池九郎の役員を発表した。

まず、常盤野、いまの岩木町枯木平を中心として、附近一帯の原野を借り入れると、牛二十頭、馬十九頭を導入して入植者を募った。しか

し、弘前から約二十四^{キロメートル} 軒も離れた山間の辺地ということもあって、移住を希望する者は極めて少なく、移住して開拓に従事したのは、外崎嘉七ら、僅かの人達であった。

農牧社では、牧畜の一環として牛肉や牛乳の販売をすることにしたが、とりあえず弘前に牛肉店を開くことになった。介一郎は、農牧社の役員の人だったが、第五十九銀行に勤めていた関係から、枯木平に移り住まなかつたので、この牛肉販売に協力することになった。

一八八三年（明治十六）十月二十二日、茂森町の古村という人の店先を借り受け、牛肉店の店を開いた。販売は、主に妻のたけや家族の者があつた。肉一斤（六〇〇グラム）十三銭五厘、半斤七銭というその値段は、当時としては高級食品だが、売れゆきはまずまずだった。その頃は、頭をザンギリ頭にし、洋服を着て牛鍋を食べるといふ、いわゆる文明開化の風潮が広まり、牛肉を食する人も、少しずつ増えていたのである。

思いがけない好評に気を良くした笹森は、より一そう販売力を増すため、同じ茂森町二十五番地の前田家の家屋敷を買いとり、店を拡張することにした。

そんな時介一郎は、妻のたけから相談をうけた。「これ以上、牛肉を売り続けるのは気が進まない。」というのだ。

「毎日、肉の塊に囲まれ、それを切り刻んで売るといふのは、とても苦痛です。私だけでなく、子供達も同じ気持ちです。」

妻にそう言われて介一郎は、困惑した。銀行勤めをしていた介一郎は、肉の仕入れや販売を、すべて妻や子供達に任せていたのだった。士族育ちのたけにとって、牛肉を切り刻んで売るといふ仕事は、やはりつらい仕事だったようだ。

介一郎は、笹森と相談の上、牛肉をやめ、牛乳の販売へ切り替える事にした。これには妻も賛成した。しかし、枯木平の農場で搾った牛乳を店まで運ぶのは大変なので、乳牛を牛舎において搾乳し、それを販売することになった。

翌一八八四年（明治十七）の十一月、茂森町に牛舎をつくり、常盤野の農場から、乳牛の母子二頭を借り出してきたが、牛の飼育管理から搾乳まで、すべて一から始めなければならなかった。まず、搾乳の方法について妻のたけと岡本たけ（若い頃に、長尾家に奉公していた人）の二人が、牧畜係の中畑清八郎に、その実習を受ける事から始まった。また、牛の世話係として牧夫一人を雇い入れた。準備が整うと、戸長こちよう役場から搾乳販売業の認可をうけ、いよいよ八月十八日から搾乳が開始された。つまり、長尾牛乳店の開業である。

介一郎は、牛乳店に「谷量舎」と命名した。その意味は、中国の『貨殖伝』にある故事からとったものである。

——昔、中国で、ある婦人が牧畜をしながら各地を巡り歩いていたが、たまたま、非常に珍しい織物を手に入れたので、その地の領主にそれを献上した。領主は大そう喜んで、その十倍にもあたる金を与えた。婦人はその金で、多数の牛馬を買い求め、牛や馬の頭数をふやし

ていった。やがてその数は、放牧している谷の数で、ひと谷、ふた谷と谷を単位として数える程になった。この事を聞いた秦の始皇帝は、その努力と成功に感心し、婦人に国ひとつを与えた。

つまり、谷をもつて量^{はか}るほどに、牛馬の数が増えていったという、その故事にあやかるようにと「谷量舎」の名を付けたのである。これも、幼少の頃に兼松の塾で漢書を学んだ、その知識の現れであろう。

当時、父周庸は船沢村折笠に住んでいたが、介一郎は、谷量舎開業の前日、しぼりたての牛乳を、長男の富士麓^{ふじね}に届けさせた。周庸はその喜びを、次のように日記に書いている。

「富士麓来たり、牛乳持参せり、売り方願い済みにて今日より開業。店売り一合三錢五厘、配達分は四錢ずつ、於茂森東側」

谷量舎を開業したのは、介一郎が丁度四十歳の時だが、この牛乳販売、当時としてはまだまだ新しい商売だった事もあり、最初のうちは、一日に二、三合（約〇・五立）から一升（一・八立）程度だった。それが少しずつ需要もふえ、やがて一日に三升ほどになるが、とても家計を支える収入にはほど遠かった。しかし介一郎は、将来、牛乳が一般家庭に普及し、この事業が必ず成功するに違いないという確信を持っていたので、銀行の仕事や農牧社の経理などの多忙な間にも、施設の改善や、乳牛の飼育についての研究を、熱心に進めていったのである。

一八八六年（明治十九）二月、父周庸が亡くなった。六十九歳だった。介一郎は、父の死を機会に、家族が一緒に暮らすことを考え、船沢村の家と茂森町の店を整理し、市内若党町八十二番地へ住居を移し、牛舎も建てた。この頃、第五十九銀行では鯨ヶ沢に支店を開くことになり、介一郎は、支店長として赴任した。このため、乳牛の管理、搾乳、そして販売と、一切を妻のたけがあたらねばならなかった。

たけは、乳呑児の末娘いね子を背負い、朝早くから、牛舎の掃除、牛の世話、搾乳と、一日じゅう働きづめに働いた。しかし、牛舎の管理費や飼料代などの出費に比し、牛乳販売から得る収益は、極めて微々たるものだった。

一方、長男の富士麓は、東奥義塾から札幌農学校に進んでいたのだが、苦しい家計や、家族たちの苦勞を知るに及んで、これ以上学業を続けるのは、両親や家族を苦しめるだけだと、農学校を中退して帰弘、このあとは全てを投げ打って、家業の牛乳販売事業を守り抜こうと決心した。そして、農学校で習い覚えた知識を実地に活用すべく、母を助けて仕事にとりくむのであった。

谷量舎では、これ迄乳牛を農牧社から借りる形で搾乳、販売をしていたのだが、乳牛の管理上、何かと問題も多かったので、この際資金を調達して専用の乳牛を買うことになった。この為、農牧社で牛馬の飼育を担当していた外崎嘉七に、その購入方を頼んだ。嘉七は、早速野辺地方面に出かけると、一週間後に見事な牛を連れてきた。南部牛の雑種だったが、強健な上に乳量の豊かな立派な牛だった。介一郎は、これに「藤号」と名付けた。谷量舎が直接購入したこの第一号の乳牛は、その後十四年間に、牡七頭、牝三頭を生むなど、谷量舎のドル箱となる

のである。

富士麓は、経営の効率化を図るため、父母と相談して、京浜や関西方面の同業者の視察に巡り、その経営法を研究してきたが、その結果、次のような方式に分けられる事に気づいた。

(一)安価な牛畜と、簡単な牛舎と経済的な飼料で、あまり経費をかけない方法

(二)優良な牛畜を、衛生的な牛舎で、精選した飼料を与える、完全飼育の方法

(一)の場合は、一時的に成功するよう見えるが、牛の健康管理上問題があり、子牛にも良種が生まれにくい。

(二)の方法は、資本を要するが、十年後、二十年後を考えた場合、その効果が大きい。

このように判断した富士麓は、父介一郎と相談の上、(二)の方式でいく事にした。

一八九四年(明治二十七年)には、青森浪打にあった、農牧社の青森販売所を買いとると、これを谷量舎青森支店として営業することになった。当時の青森は、県庁所在地としてその発展性が期待されていたし、またこの年の十二月、青森・弘前間に鉄道が開通したことも、青森進出を決めた理由のひとつであった。そしてこの年、日清戦争が始まり、青森の五連隊に野戦病院が設置され、谷量舎青森支店は、この病院へ

牛乳を納入するなど、その利用も次第に伸びていった。

日清戦争後、軍備の強化が叫ばれ、一八九七年（明治三十）には、弘前市に第八師団が設置されることとなり、第三十一聯隊をはじめ、歩兵、砲兵、騎兵と、兵舎が次々と新築され、大勢の軍人とその家族が移住してきた。この為、市民の間には、都会風な食べものにふれる機会が多くなり、一般家庭にも洋式の料理が少しずつ入りこむようになった。

この頃になると、乳牛の数も増え、管理と運営に人手を要することから、介一郎も銀行を辞め、家族が力を合わせて家業にとりくんだ。弘前は富士麓が、青森支店は介一郎が担当し、仕事も極めて順調だった。

当時の牛乳販売は、量り売りが主であったが、牛乳の需要が多くなるにつれ、政府でも衛生上の面から「牛乳取締規則」を作り、牛乳の容器はガラス瓶を使う事が決められた。こうして、蒸気消毒による衛生的な瓶詰の牛乳が売り出されるようになって、牛乳の需要はより高まった。その結果、弘前の牛乳販売店は、谷量舎の他に、長谷川、中畑、宮本など六軒に増えるのである。

谷量舎では乳牛の数もふえ、若党町の牛舎は狭くなったので、春日町に広い敷地を求め牛舎を建て直した。こうして一九〇七年（明治四十）には、弘前、青森を合わせた乳牛の数は五十六頭、牡牛二頭、子牛四十八頭、計百六頭までになっていた。

一九一三年（大正二）九月頃から、介一郎は病床につくようになっていたが、翌年三月二十四日、七十歳で亡くなった。介一郎は臨終の日、

子ども達に、次のような遺言を残した。

一、官私の俸給のみで衣食するのではなく、必らず恒産こうさんを治めよ

一、飲酒は慎むこと

一、金貸しはしないこと

一、結婚は、親戚同志を避けること

一、学問は儒学じゆがくの他洋書も読むこと

「恒産を治めよ」というのは、しっかりした財産や職業を持ってという事だが、儒学（漢書）だけでなく洋書（西洋の学問）も学べ、というのは、介一郎の進歩的な考えから出た言葉であろう。

介一郎が亡くなったあとの青森支店は、四男の周平が仕事を引き継ぎ、兄弟力を合わせて、青森、弘前の谷量舎の経営にとりくんだのである。

介一郎は、男四人女二人という子沢山だったが、男子は、長男の富士麓と四男の周平が、谷量舎の仕事を引き継いだ。二男の健字は、東京

の医学校に進んで医者となり、青森に開業、三男の愛蔵は、十九歳の時に渡米し、カリフォルニアで牧場主となるなど、それぞれの道で成功している。

晩年の介一郎について、健字の妻あい子は、次のように語っている。

非常に真面目な方で、ふだんはいつも、木綿の着物に袴をはき、前掛けをかけ、きちんと帳場に坐って仕事をしていました。長いこと銀行勤めをしていた関係か、帳簿をつけるのが趣味のようでした。嫁入りするとき挨拶にいくと、短刀一ふりと習字のお手本と、「借金帳」と書いた古い帳面を渡されました。そして「私は、親のしつけとして、どの子どもにもこの借金帳を作っておき、一人前になって独立した時に渡している。中等教育までは親の負担だから免除しているが、そのあとの費用は、子どもの借金として全部これに記録している。健字は医者になったので、随分金がかかったよ。」と行って笑われました。

短刀、習字の手本、そして借金帳と、いずれも、介一郎の人柄がしのばれる興味あるエピソードである。

参考文献 船水 清『長尾介一郎』「ここに人ありき③」一九七二年（昭和四十五）陸奥新報社

出典：弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、四八・六〇頁